

「眠れる森の美女」とカニバリズム

高 岸 敦 夫

はじめに

「眠れる森の美女」はバレエやディズニーのアニメ映画など様々なジャンルの媒介によって今日でもよく知られている昔話の一つである。しかしながらその原典として扱われているシャルル・ペロー『昔話集』(1696)¹⁾におけるこの物語の後半部分は今日知られているものと大きく異なっている。ペローの『昔話集』における主人公の王子の母親は人食い鬼の血縁者であり、彼女は自分の孫や嫁を食べようとするのである。またペロー以前に書かれた「眠れる森の美女」の類話とされているジャンバティスタ・バジレの「日と月とターリア」(『ペンタメローネ』5日目第5話、1634～36)²⁾でもペローの物語によく似たカニバリズムが描かれている。バジレの方は王に愛人がいることに嫉妬した王妃が愛人の子供を王に食べさせようとする話であり、ギリシア・ローマ神話や西洋文学作品などで古くから語り継がれてきた王道ともいえる食人譚であった。それがペローを経て、19世紀以後になるとカニバリズムの個所が排除されていった。本稿はこうした「眠れる森の美女」におけるカニバリズム描写の変遷から昔話とカニバリズムとの関係性を分析しようとするものである。

1. 『変身物語』から『グリム童話集』まで

一般的に「眠れる森の美女」のあらすじとして知られているのは、ヒロインが鍾に手を刺したため深い眠りにつき、最終的に王子の来訪と共に目を覚ますというものである。このヒロインが鍾に手を刺すことや

深い眠りにつくことについてはすでにそのルーツや背景が詳しく取り上げられている³⁾。確かにこの場面はバジール版やペロー版でも共通して描かれている。しかしその一方でカニバリズムに関しては、バジール版とペロー版双方ともクライマックスとして描かれているにも関わらず、ぞんざいな扱いを受けている。また「眠れる森の美女」の類話の比較においても、カニバリズムの箇所が省略されたグリム兄弟の「野ばら姫」⁴⁾の方を「眠れる森の美女」関連の昔話として評価する声も見受けられる。しかしながらより古い時代のもを原典に近いものとして評価するならば、カニバリズムの要素こそ「眠れる森の美女」の物語で中核をなすものといわざるを得ないであろう。というのもペロー版より古いバジール版ではカニバリズムの話が全面に出されており、ヒロインの眠りと目覚めはあくまでその後起こる惨劇の前段階にすぎないのだ。バジール版では、ペロー版やグリム版の王子に該当するのは妻帯者の王であり、この王とその妻、ターリアの三角関係のもつれが物語後半の惨劇へと発展する。不義に憤慨した王妃がターリアと王との間にできた双子の子供ソーレ（日）とルーナ（月）を王に食べさせようとするのである。このような復讐として親族の肉を食べさせるという話は文学作品において多くの傑作が生まれているが、とりわけオウィディウスの『変身物語』⁵⁾の「テレウスとプロクネとピロメラ」は後世への影響が大きく、「日と月とターリア」とも人間関係や話の筋など共通するところが多い。このオウィディウスの物語は、トラキア王テレウスが妻の妹であるピロメラを凌辱し、彼女の舌を切り落とすという凄惨な出来事がある後に起こるカニバリズムの発端となっている。夫の所業を知ったプロクネは妹の復讐として夫との間にできた自分の子供を殺し料理して、夫に食べさせる。こうした血の応酬が繰り返されるオウィディウスの物語は、シェイクスピア初期の残酷劇『タイタス・アンドロニカス』にも多大な影響を与えた。このシェイクスピアの作品において『変身物語』が登場人物によって何度も言及されるうえに、オウィディウスの物語と同様の出来事が再現されるのだ⁶⁾。

「日と月とターリア」もこのようなオウィディウスとシェイクスピアの作品によく似た対応関係を見ることができるであろう。というのも両者ともに三角関係のもつれからカニバリズムに発展していくものだからである。「日と月とターリア」におけるこの三角関係の発端は妻を持つ王が眠っているターリアを偶然発見し彼女を犯してしまうということであり、ターリアは眠りについたまま彼との子供を身ごもり出産することになる。この場面はオウィディウスと関連付けると、ピロメラへの凌辱に呼応するものだといえる。とはいえ後に目覚めたターリアはピロメラとは対照的に王と意気投合して、王の愛人として幸せな生活を送る。一方、王の裏切りに激怒した王妃はその矛先を愛人とその子供にも向ける。オウィディウスの物語の王妃もバジールレの物語の王妃も復讐心から夫に彼の子を食べさせようとする点では共通している。しかしプロクネの行いはピロメラが受けた惨たらしい被害を清算するための代償と見なすこともできるのに対して、バジールレの方の王妃は昔話によく見られるヒロインに敵対する典型的な悪女であり、彼女の行いに同情の余地は与えられない。そして両者との最も大きな違いはその結末である。バジールレの物語では王妃の協力者である料理人が子どもたちに同情したため、家畜が身代わりとなって出される。結局、王妃と彼女に加担した者だけが断罪されて、すべてが丸く収まるのである。事件の発端となる行いをした身勝手な王にとっても、自分の子供を危うく食ってしまうところだったとはいえ、あまりに都合の良い結末となる。彼は罰せられないばかりか、邪魔ものの妻を排除し、世継ぎを生んだ愛人とその子供を向かい入れることができたのである。『イタリア民話集』を刊行したイタロ・カルヴィーノによればイタリアの民間伝承における「眠れる森の美女」の類話のほとんどがこのバジールレの物語に酷似したものとのことである⁷⁾。

「日と月とターリア」においてターリアの目覚めはその後の食人の宴に至るきっかけとなるものであった。それに対してペローの「眠れる森の美女」は眠れる姫とその眠りを覚まさせる王子との恋愛をロマンチックに膨らませている。王子は眠れる女性を凌辱するどころか、触れること

もしない。二人は結婚まで体に触れることすら抑制しないといけないという上流社会のあるべき恋愛の見本を示すのである⁸⁾。しかし二人が結婚して王子が父の死によって国王に即位した後、物語は突如として人肉を巡る攻防へと急変し、それまでのロマンチックな出来事は忘れ去られてしまう。ここでのバジーレ版の王妃に相当する女性主人公の王子の実の母親である。ただし彼女は夫や息子に人肉を食べさせようとするわけではない。王子の母は人食い鬼の血筋のものであり、彼女自身が人肉を食べることを欲するのである。母后は実の孫であるオロール（曙）とジュール（日）、そして息子の妻をその人肉嗜食の性質ゆえに料理にして食べようとする。しかし哀れな妻子に同情した料理人が家畜を身代わりにしたために、妻子は助けられることになる。そのことを偶然知った母后は激昂し、妻子や関係者を集めて毒蛇などが入れられた棺桶に入れて皆殺しにしようとする。しかし息子の思わぬ帰還に驚いた母后は結局自分が用意した棺桶の中に自ら入り込み、死んでしまう。このような改変の意味することについては後でも論じるが、いずれにせよ前半の王女の眠りと後半の食人譚は話の筋において直接的関連性がなく、唐突で不自然な展開と捉えられても致し方がないものとなっている⁹⁾。

グリム兄弟の「野ばら姫」はバジーレの「ターリア」やペローの「眠れる森の美女」の類話であるが、最も今日のイメージに近いものである。ここでは食人譚は語られず、王女が王子との口づけによって眠りから覚め、二人が結婚することで話は終わる。「野ばら姫」は『グリム童話集』でも版によって大きく異なっていることで知られている。版を重ねるごとに描写が細やかになっていき、最終版の7版は初版の1.5倍、初版もそれ以前の草稿（エーレンベルク稿）と比べると二倍の長さに加筆されていると指摘されている¹⁰⁾。「野ばら姫」は今日ではペローの影響を色濃く受けたものであることが定説となっている。ハインツ・レレケの指摘以降、ハッセンプフルーク家の長女マリー・ハッセンプフルークから聞き取ったものであるとされるようになった。ハッセンプフルーク家はユグノーであったためフランスからドイツへ避難してきた一族であり、彼女

の語った昔話はペローやドーノワ夫人などに深くなじんだものだったことが指摘されるようになったのである¹¹⁾。またグリム兄弟も「野ばら姫」に対してバジールやペローの物語との関連性を意識していた¹²⁾。しかし結局、「野ばら姫」において食人譚が復活することはなかった。この改変がグリム兄弟自身によるものなのかは分かっていないが、いずれにせよグリム兄弟は「野ばら姫」に食人譚は不必要なものと判断した。そしてこのグリム版が、「眠れる森の美女」の話型として、バジールやペローのものを圧倒してしまったのである。

とはいえ『グリム童話』においてカニバリズムがタブーであるというわけではない。確かに「千びき皮」¹³⁾や「子どもたちが屠殺ごっこをしていた話」¹⁴⁾のようにその性描写や残酷描写が物議を醸したためからか、話が変化したり、削除されたりしたものもある。しかしカニバリズムを描いた物語としては「百榎の話」¹⁵⁾や「強盗のおむこさん」¹⁶⁾などがあり、少なくともカニバリズムの光景を描くこと自体を不適切とみなしてはいなかったといえる。「百榎の話」に至っては家族の愛憎劇がカニバリズムに発展するという「日と月とターリア」によく似た話である。ここでは後妻が先妻の子どもを夫に食べさせるというものであり、子どもは本当に殺されて料理にされ、父親に食べられる。だが最終的に子どもは生き返り、邪悪な後妻は死ぬという「ターリア」と同じような結末を迎えるのだ。いずれにせよ「野ばら姫」における食人譚の削除はグリムによって書き取られる以前に道徳的、教育的観点から削除されたという可能性はあるにせよ、「野ばら姫」にカニバリズムが描かれていないのはこの話の中であえて盛り込む必要がない判断されたのであろう。

2. 協力者 ― 料理人

バジールやペローの物語がギリシア・ローマ神話のカニバリズムのエピソードと大きく異なっているのは、実際に人肉が食べられることはなく、最終的に全てが丸く収まる場所であろう。バジール版、ペロー版ともに、殺して料理するはずの料理人が犠牲者に同情し、身代わりを用

意して、妻子を助けるという展開になっているのである。しかしながらわざわざプロの料理人を登場させているにもかかわらず、彼らは食事を盛り上げる人間としてプロクネやアトレウスなどよりも明らかに見劣りしてしまう。オウィディウスの「テレウスとプロクネとピロメラ」の場合、人肉を料理するのはプロクネ自身である。彼女は実子イチュスを殺して料理し、父祖伝来の聖餐だとして夫以外のものを遠ざける。そしてテレウスが自分の息子の肉を食べた後に「イチュスをここへ呼んでくれ」と言うと、次のように言って種明かしをする。「お呼びの子は、あなたのなかにいますわ」¹⁷⁾。またセネカの『テュエステス』では、アトレウスは弟のテュエステスの子供たちを料理して弟に食べさせる。アトレウスは宴の場において巧みな言葉でテュエステスを不安がらせた上で、ネタばらしをする。人肉を調理したのがアトレウス自身でなかったにせよ、彼は人肉食の宴を盛り上げるためサーヴィスに最大限の気配りをする¹⁸⁾。

それに対してバジーレ版やペロー版に登場する料理人は、まず何よりもヒロインとその子供を救うという役割のために登場する。そしてそのために彼らは偽物の人肉料理を作ることになるが、食事の場において料理人の存在は消されてしまう。「日と月とターリア」では王妃がサーヴィス係のふるまいをするが、彼女は復讐の興奮を抑えることができず、王に不愉快がらせる言動を発することしかできない¹⁹⁾。ペローに至っては、人食いの母后は騙されたことに気づかず、ただ料理を貪り喰うのみである。また事が露見するも両者共にこの食事の直後ではなく、後日になってであり、人食いの宴から結末までの躍動感が大きく削がれてしまっている。バジーレの方では王妃が子どもたちに続いてターリアを殺害しようとした際に、ターリアが叫んだために、王達が駆けつけて、すべてが発覚する。ペロー版の方は、さらなる人肉を求めて徘徊していた母后が偶然に自分の孫の声を聞きつけて自分が騙されていたことに気が付く。それも言うことを聞かないジュールに対してヒロインが鞭打とうとして騒ぎになっているところに出くわしたのだ。いずれにせよ料理人は偽物の人肉料理を作る以上のことを行うわけではなく、人肉料理の宴で緊迫

した駆け引きが展開されることもない。

とはいえペロー版は偽物の人肉料理を作る過程に重きを置いている。母后はオロールとジュール、そして嫁をロベールソースと共に食べるところを所望する。それに対して命令を受けた料理人は哀れな妻子に同情し、子どもたちの代わりに子山羊を、ヒロインの代わりに雌鹿を犠牲にして差し出す。ペロー版では固有名詞が使われたり、大人の肉の固さが問題になったりして話が盛りたてられている。しかしこれは逆に不自然さを増幅させてもいるし、後でも論じることになるが余計なものをつけ加えたとして批判や低評価を生む要因にもなっている。ロベールソースは偽物の肉を誤魔化す役割を果たしているともいえるが、この言葉が実際のフランスの王族や貴族の食事を連想させることで使われているとすれば逆に問題が生じてくる。ペロー版の料理人はメトル・ドテル (maitre d'hôtel) だが、彼が身代わりの家畜を殺して、ソースを作り、料理を仕上げるという一連の作業をすべて一人で行っているように描かれている。メトル・ドテルはそもそも単に料理に作る人物ではなく、サービスを取り仕切り、食事空間を演出する役目を担う人物である。にもかかわらず彼が料理のサービスをどのように行ったのかの言及はなされておらず、ただ一人で黙々と料理を作ることが仕事であるかのように描かれている²⁰⁾。このようなところは現実から完全に切り離されたおとぎ話の世界なら特に気にすることではない。しかし現実のフランスの宮廷を想起してしまえば、こうしたメトル・ドテルの描き方は不自然さが目立つものになるのだ。

バジールとペローがこのような料理人の働きを付け加えたのは、もちろんヒロイン達が助かるという展開にするためであるが、このことはまた昔話の物語形式自体とも深く関わっている。その点については後で論じていくことにしたい。

3. 昔話とカニバリズム

以上で取り上げてきたように、「眠れる森の美女」関連の食人譚は西洋

文学において伝統的に存在するカニバリズムの流れをくむものであるが、一方でそこには昔話特有の要素も垣間見られる。ここでは主にマックス・リュティによる昔話の物語形式論を取り上げながらそのことについて述べていきたい。リュティによれば昔話は神話や伝説とはまったく異なる物語形式を持ったものであるのだが、この違いについて彼はカニバリズムの例も挙げている。リュティはギリシア神話のペロプスの挿話を昔話には見られない現実的側面があることを指摘している。ゼウスの子タンタロスは神々を欺くために、自分の子ペロプスを殺して料理にして捧げるが、切り刻まれて煮込まれたペロプスの肉をデメテルだけ気付かずに食べてしまう。後に神々の力によって生き返ったペロプスだが、デメテルが食べた肩の部分は欠損し、さらに彼の子孫は肩に斑点が残ることとなる。昔話だとうした体の欠損があったとしても、その後の展開で何事もなかったかのようにそのことが無視されることの方が一般的なのだという。こうした細かなディテールに無頓着で厚みのない昔話の平面性は、一方であらゆるしがらみを見無視することができ、分かりやすさやダイナミックな展開を提示することを容易にするのだという²¹⁾。

リュティはまた昔話の特徴の例としてしばしば「眠れる森の美女」を挙げている。リュティによればグリムの「野ばら姫」はペローに基づきながらも、昔話固有の精密さ、完全さをよく理解して様式を立て直したものである。リュティは物語冒頭の洗礼式を具体例としてグリム版がいかに簡潔化しているかを指摘している。グリムの方は12人の仙女が12枚の黄金の皿でもてなされる。この12枚の黄金の皿という簡潔な言い方に対して、ペローの方は食器の数をはっきり言わず、もってまわった言い方になっているのだ。リュティはまた、バジールの方はより現実的であるとも指摘している。バジールの物語では仙女ではなく賢者が予言者として登場し、その予言も「王女が死ぬ」というようなはっきりしたものではなく、「危険が迫っているだろう」というような不特定なものである。予言を聞いた王の対応も、ペローやグリムにあった国中の糸車を処分せよという命令と違い、宮廷に亜麻や麻を持ちこんではいけないとい

う穏健なものになっている。そのようなことからリュティの昔話形式論に最も合致するものはグリム版であり、ペローはそれにくらべてリアリティへのこだわりが昔話としての良さを削り取ってしまった。ペローは100年の時間の経過を気にして、姫はおばあちゃんのようなドレスをきていた、奏でられる音楽が100年たってもう演奏されなくなったものだったというようなことをわざわざ記述しているが、そうしたものはリュティの定義する昔話にとっては全くの蛇足でしかなかった²²⁾。

こうした昔話論に関連する部分はバジールやペローのカニバリズムを描いた個所においても数多く見られる。「日と月とターリア」はペローの「眠れる森の美女」よりもギリシア神話の要素を色濃く残したものである。ベッテルハイムらが指摘するようにターリアとソーレ、ルーナはギリシア神話のレトとアポロン（太陽神）、アルテミス（月の女神）と符合している。そしてそのことは王と王妃がゼウスとヘラにそれぞれ対応することを意味している²³⁾。しかしその一方で『変身物語』などと比べるとリュティのいう平面性も際立っている。人肉を食べさせる側と食べさせられる側との緊迫した駆け引きがなくなり、人肉を食べることを巡っての悲劇や葛藤は削り取られ、淡々と描写されるのである。王とターリアとその子供たちはそれまでのいきさつを気にすることなく幸福な生活を手に入れるのだ。

バジール版の王妃はプロクネやアトレウス、タイタス・アンドロニカスなどの系統に連なる人物であるが、ペロー版の人食い母后はむしろ他のペローの昔話の悪役、とりわけ「親指小僧」²⁴⁾や「長靴をはいた猫」²⁵⁾の人食い鬼（ogre）に重なり合うキャラクターである。「親指小僧」の人食い鬼は人間を嗅ぎ分けるための優れた嗅覚を持ちながらも、主人公の策略により誤って自分の娘達を貪り喰ってしまう。「親指小僧」と対照させれば、「眠れる森の美女」の母后があれほど人肉を所望したにもかかわらず、別の肉を出されても気づかなかったことはむしろお約束通りの展開だともいえる。また彼女が自分の孫や嫁を食べることを望む際に同じような台詞を3回繰り返し、料理人も同じような行動を3回繰り返す²⁶⁾。

またリュティが昔話の特徴として挙げている肉親関係の希薄さもペロー版を特徴づけるものとなっている。人食いの母后は主人公の実の母であるが、主人公やその子供たちと人食い鬼との血縁関係は全く問題にならない。ヒロインに対しては単なる敵対者の役割を担うだけであるが、このことはリュティが嫁姑関係で指摘していることと符合する²⁷⁾。母后がこうしたヒロインの単なる敵対者であり人食い鬼であるとすれば、わざわざ実の孫や嫁を食べようとしたことの深い動機は必要ないのである。もっとも主人公が実の母の死を何とも思わないのは規範となる人物の行動にそぐわないと考えたのか、母の死を悲しんだことが申し訳程度に盛り込まれている。

ペロー版はバジーレ版よりもさらに昔話的な要素に磨きが掛けられているのだが、問題はペローが昔話の特徴である無時間性を壊している指摘されていることである。料理人はヒロインが大人になって肉が固くなったのでその代わりになる家畜が見つからず、もうだますことはできないとして母后の命令に従おうとする。結局ヒロインの姿を見て思い留まり、これまでと同じように母后を騙すことになるのだが、母后は人肉料理だと信じ込み満足するだけであった。このような料理人の葛藤は3度の繰り返しのリズムが著しく損なうことになった上に、話の筋に何の影響も及ばさない。ここでわざわざこのような蛇足を描いたのは、耐え忍ぶヒロイン像を付け加えたかったからと言わざるをえない。理想的な貴婦人は、どんな事態に陥っても、取り乱すことなく、無抵抗に受け入れなければならない。ペローは昔話でヒロインを美化しているが、その理想像は女性に対する偏狭な価値観に基づくものである、とジャック・ザイプスは指摘している。「彼の理想とする上流階級の文明化された女性、彼が作り上げた女性は美しく、礼儀正しく、しとやかで、よく働き、きちんと身だしなみを整えており、どんな場合にも自分を抑制する術を知っている」²⁸⁾。邪悪な人食いの姑はこうした従順なヒロイン像を明確にするために用意された極端な反対像だといえるだろう。そこにはまた遠い異郷の地に住むとされた食人族（カニバル）のイメージも少なからず

投影されている²⁹⁾。ペローにとって、それが昔話であっても、人肉を食べるものは規範となる人物の敵対者であり、しかも非人間と呼べるものでなければならなかった。ペローのヒロイン像と人食い女像は昔話的な極端性を表すものであると同時に、当時の人々が遠い異国に対して思い描いていた人物像とも重なり合うのだ。

おわりに

ペロー、グリム兄弟を経て「眠れる森の美女」は眠れる姫が王子の来訪によって目覚めるという場面が最大の見せ場とする物語となった。しかしながら近年このようなただ待ち続けるという従順なヒロイン像は偏狭で抑圧的な女性観によるものだという批判が見られるようになった。しかもそれは昔話が本来備えていたものというよりも、ペローやグリム兄弟、あるいはディズニーアニメ等が付与していったものと指摘されている。本稿の結びとして指摘しておきたいのは、こうした批判的読みには人食いの分析を付け加える必要性があるということである。「眠れる森の美女」の物語は王女の深き眠りとカニバリズムが合わせ鏡となっている点が特筆すべきものだとも見なすことができるのだ。

(本学非常勤講師)

注

- 1) Charle Perrault, «LA BELLE AU BOIS DORMANT», *CONTES*, Garnier, 1967.
- 2) ジャンバティスタ・パジール『ペンタメローネ：五日物語』杉山洋子、三宅忠明訳、大修館書店、1995.
- 3) Cf. Marc Soriano, *Les contes de Perrault: culture savante et traditions populaires*, Gallimard, 1968. ブルーノ・ベッテルハイム『昔話の魔力』波多野完治・乾侑美子訳、評論社、1978. 浜本隆志『ねむり姫の謎：糸つむぎ部屋の性愛史』講談社、1999.
- 4) 「野ばら姫」(KHM50)、「いばら姫」とも。ヤーコプ・グリム／ヴィルヘルム・グリム『完訳グリム童話集』2、金田鬼一訳、岩波書店、1981、所収。
- 5) オウィディウス『変身物語』上巻、中村善也訳、岩波書店、岩波文庫、1981.
- 6) ウィリアム・シェイクスピア『タイタス・アンドロニカス』松岡和子訳、筑摩書

- 房、ちくま文庫、2004.
- 7) イタロ・カルヴィーノ編『イタリア民話集』河島英昭編訳、岩波書店、岩波文庫、p. 349.
 - 8) Perrault, *op. cit.*, pp. 102-103.
 - 9) ベッテルハイム、前掲書、p. 301.
 - 10) Cf. 浜本、前掲書。樋口淳『民話の森の歩き方』春風社、2011.
 - 11) ハインツ・レレケ『『マリーおばさん』の『きつすいのヘッセン』のメルヘン』小澤俊夫他『現代に生きるグリム』岩波書店、1985.
 - 12) Cf. 樋口、前掲書。
 - 13) 「千びき皮」(KHM65)、グリム、前掲書。初版では王が実の娘と結ばれるという話であったのが、その後の版では、姫と最終的に結ばれるのは別の国の王になった。
 - 14) 「子どもたちが屠殺ごっこをしていた話」(KHM22)、『初版グリム童話集』1、吉原高志、吉原素子訳、白水社、白水Uブックス、2007、所収。初版には収録されていたが、第二版以降は削除された。
 - 15) 「百榎の話」(KHM47)。「百榎の木」「ネズの木」とも。グリム、前掲書所収。
 - 16) 「強盗のおむこさん」(KHM47)。「泥棒の花嫁」とも。グリム、前掲書所収。
 - 17) オウイディウス、前掲書、p. 253.
 - 18) セネカ『セネカ悲劇集』第2巻、小川正廣訳、京都大学学術出版会、1997.
 - 19) バジーレ、前掲書、pp. 252-253.
 - 20) Cf. 数藤ゆきえ『昔話の食卓』郵研社、2009.
 - 21) マックス・リュティ『昔話：その美学と人間像』小澤俊夫訳、岩波書店1985、pp. 129-130. ペロプスのについては型にはめられた象牙についてはオウイディウスの『変身物語』でも描かれている。オウイディウス、前掲書、p. 241.
 - 22) リュティ、前掲書、pp. 130-132. リュティ『ヨーロッパの昔話：その形式と本質』小澤俊夫訳、岩崎美術社、1969、p. 35.
 - 23) ベッテルハイム、前掲書、p. 308.
 - 24) «LE PETIT POUCE», Pelault, 前掲書。
 - 25) «LE MAITRE CHAT OU LE CHAT BOTTÉ», Pelault, 前掲書。
 - 26) Pelault, 前掲書、pp. 104-105.
 - 27) リュティ、前掲書 (1969)、p. 29.
 - 28) ジャック・ザイプス『おとぎ話の社会史：文明化の芸術から転覆の芸術へ』鈴木晶/木村慧子訳、新曜社、2001、p. 47.
 - 29) Cf. ピーター・ヒューム『征服の修辞学』、岩尾龍太郎/正木恒夫/本橋哲也訳、法政大学出版局、叢書・ユニベルシタス、1995.